

夢話・七
迎え火

大城拓人

Published by Takuto Oshiro
Copyright © 2011 Takuto Oshiro All right reserved.

迎え火

熱い、橙色のかがり火。朱色の提灯。
それらは「迎え火」と呼ばれ、初夏、「御霊イザナイ」の時期になると、先祖の霊を迎え入れる為、目印となるように家々の軒先や玄関前に垂らされ飾られた。
火の見櫓の周りには数こそ少ないが露店が並び、その村にとって「御霊イザナイ」は盆と正月に次ぐ一大行事なのであった。
だが、青年瑛一郎はその祭りを含め、自分の生まれ育った村全てを嫌っていた。ただ火を点ける、飾る、というだけの行為に何の発展性も見出せなかった。先祖の霊などに刺激は感じなかった。瑛一郎は他の多くの若者達と同じように、自分を救ってくれる何か、を求めて、都会へ繰り出して行った…。

「ちくしょう、面倒臭エことになった！」
と、瑛一郎は叫んだ。一人娘の唯来菜がしゃっくり混じりに泣く。幼稚園に入り、少しは女の子らしい分別を覚えて来たらしく、以前のような爆発的な泣き声は上げないが、それでも、その押し殺した「気遣いを含んだ泣き声」は若い父の神経を十分に逆撫でた。
「もう泣くな！ 降りるぞ、車から。ここに居たっても仕様がねエ！」、瑛一郎は唯来菜を半壊した車から引きずり出すように降ろした。
娘と手を繋ぎ、巨木にぶつかって前の部分が波打つようにひしゃげた車を見ると、「命が助かっただけでも奇跡って奴なのかな」、と瑛一郎はしみじみと思った。念のため、瑛一郎は携帯電話を開き、電波の状態を確かめた。手付かずの闇にデジタルな白い光が煌く。やはり…、圏外。「面倒臭エ！」、と瑛一郎はあえて唯来菜にも聞こえるように呟き、携帯電話を閉じた。唯来菜のただただ涙を啜った。

瑛一郎は街灯のない、ひたすら漆黒に閉ざされた自分達の周囲をありったけの憎しみを込めて見渡した。何も無い、戦国時代から変わっていないんじゃないか、とも思われる故郷の山道である。瑛一郎はつくづく、帰省なんかするんじゃないか、と思い、後悔した。

今はまだ、瑛一郎親子の元には詳しい情報は入って来ていないが、どうやらこの彼の故郷の土地一帯が未曾有の大地震に見舞われたらしかった。

ほんの気まぐれであった。生まれた娘を、せめて一度は父と母に見せようと、GWを利用し故郷の村に向かう途中の山道で地震に襲われたのだった。瑛一郎は激しい揺れにハンドルを取られ、程なく近くの巨木に激突してしまったのだ。約12年ぶりの帰省で、これ、である。「だから田舎は嫌いなんだよ！」、彼は声に出して毒づいた。

唯来菜がくしゃみをした。「寒いかな？」、と瑛一郎は訊いた。幼い娘は無言で頷いた。瑛一郎も若干寒気を感じていた。5月に入っても、瑛一郎の故郷は夜になれば10℃以下に下がる。「野宿は出来ないな」、若い父は呟いた。寒さもあるが、ヒグマも出るのだ…。

「唯来菜、パパの手をしっかりと握ってるんだ。これから、パパのお父さんとお母さんのお家に行くからな。そうしたら、水も飲めるし、ご飯も食べられる。歩けるな？」

娘は頷いた。しかし、その頷いた顔すらも確認できない程の深い闇が親子を包み混んでいた。親子は携帯電話の電気で足元だけを辛うじて照らしながら、30分ほど山道を歩いた。だが、地震で地形が変わり、道らしい道はなくなっており、崩れた土砂の山を超えたところで瑛一郎は自分達がどっちの方向に進んでいるのかさっぱりわからなくなってしまった。

ヒグマか、ムササビか、辺りから葉っぱの擦れる音が聞こえる。瑛一郎も不安と疲労の汗をかき、唯来菜も震える湿った手をぎゅっと握り返してきた。立ち往生していると遂に携帯電話のバッテリーは切れ、宇宙の果てのような闇がやって来た。

しくしく、と唯来菜は音を発して泣き出した。連れられて瑛一郎も泣き出したくなっていた。「こら、唯来菜、泣くなよ」、だがその父の声は震えていた。

かっ、と、橙色の光が唯来菜の濡れた顔を照らした。瑛一郎も頬に熱を感じた。生命の気配だ。親子の眼に光が飛び込んで来た。

光は親子の足元の崖の下から黒い樹々を割って射して来る。

瑛一郎は唯来菜の手を引き、樹に掴まりながら慎重に崖を下り、もっと光が視えるところまで出ようとした。

間違いない、村の光だ、俺の村の光だ、と瑛一郎は思った。そしてはっとした。そうだ、すっかり忘れていた、GW中は祭りの時期、「御霊イザナイ」の時期だったんだ…！

視界の開けているところまで出ると、瑛一郎は堪え切れず、思わず涙を流した。村の人口とほぼ同じぐらいの数と思われるかがり火、提灯の灯が親子の眼下に広がっていた。「迎え火」とは

よく言ったものだ、故郷を捨てた俺を、こうして迎えてくれたんだ、と瑛一郎は涙を拭つつ呟いた。

もうここまで来ると道も地震の影響がなく、平坦だ。唯来菜が、「早くおじいちゃん、おばあちゃん家に行こうよ」、と嬉しそうに父の手を引っ張った。「おお、そうだな」、と瑛一郎も勢いよく返事をした。

村まであと少し。まるで霊になったかのように、親子の足取りは軽くなっていた。

程なく、光り溢れる村に着いた。すると懐かしい人々が、瑛一郎の父と母が、親子を出迎えてくれた。父母は直ぐ様、瑛一郎親子に毛布を掛けてくれた。温かい。これが故郷というものか。かがり火と提灯の灯が、漆黒の空を支配した。

「…みません、すいません、大丈夫ですか？ 聞こえますか？ もしもーし！」

瑛一郎は全身を強く揺り動かされ、眼を開けた。

彼の目の前には黒いヘルメットを被り、迷彩服を着、全身土埃で塗れた如何にも屈強そうな男達が自分を見下ろし、立っていた。夜ではない、昼。彼らは自衛隊だった。瑛一郎は土砂の上で、毛布に包まって倒れていた。それは唯来菜も同じだった。

「ここは…？」、と瑛一郎は軽く体を起こし、自分を起こした自衛官に訊いた。

「○○村ですよ、大丈夫ですか？ 村の方ですか？」

○○村…、瑛一郎の生まれ故郷である。そんなはずがない、と彼は思った。何も無いじゃないか、民家も、火の見櫓も、提灯も、かがり火の跡も…！ 自衛官は顔を曇らせて言った。

「誠に、残念です。誠に申し上げ難いのですが、昨日の地震による土砂崩れで村は全て埋まってしまいました…。村民の方々の生存は絶望的かと…」

何が何だか、瑛一郎にはわからなかった。では、俺が昨晚視た光は、村の人達は、父母は、この毛布はなんだというのか？

ぐったり疲れ、瑛一郎は再び仰向けになった。

すると彼は、彼の足の先にある土砂の隙間から、ちろちろと上に昇るものがあることに気付いた。

それは一つ二つばかりではない、土砂の隙間という隙間から、ちろちろと。太陽の下ではわかりにくいですが、それらは明らかに発光していた。

「燐ですね」、と二台の担架を持って来た自衛官は言った。

「僕たちはね、よく見るんです。きっと人の魂がね、燃えているんですよ」

(終)

夢話・七 迎え火

<http://p.booklog.jp/book/26465>

著者：大城拓人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/takuto-oshiro/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26465>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26465>